

2018.12.5 (水) 10:10～10:45  
CIVI研修センター

平成30年度「障害学生支援専門テーマ別セミナー」

発達障害学生の就労を実現するための支援の在り方  
～意思表示支援とセルフアドボカシーを中心に～

## 基調講演 I

**発達障害学生の就労を実現するための支援の在り方**

富山大学保健管理センター 准教授

富山大学教育・学生支援機構 学生支援センター副センター長

アクセシビリティ・コミュニケーション支援室長

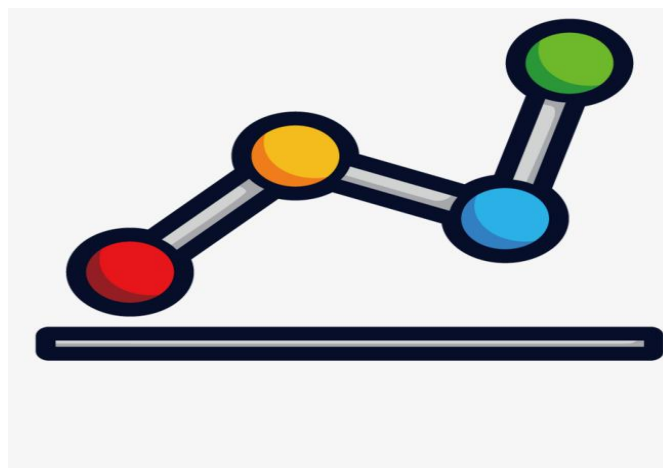
西村優紀美

# 話の流れ

1. 統計からみる発達障害学生支援の現状
2. 発達障害学生に対する面談の意義
3. 発達障害学生の就労を実現するための支援の在り方
4. 「学ぶ」と「働く」を支える支援



# 1. 統計からみる発達障害学生支援の現状



# 統計から見える発達障害学生支援の現状①

(平成29年度JASSOの実態調査結果報告書より)

- 在籍率と支援人数

- 診断有の発達障害学生の在籍率：54%  
(632校/1,170校)
- 支援人数：3,698名（診断有） + 3,191（診断無・配慮有） = **6,889名**  
※全支援人数の37%（診断無含む）

- 主な修学支援内容（実施率順）

- 授業関連：1.配慮依頼文書配布    2.履修支援  
                  3.学習指導                    4.出席に関する配慮
- 授業以外：1.専門家のカウンセリング    2.対人関係配慮  
                  3.自己管理指導                    4.居場所の確保

# 自由記述に見る障害学生の修学支援課題

( JASSOの実態調査分析報告より)

- グループ化された6つの修学支援課題のうち、4つに発達障害が大きく関与
  - 1. 把握や支援提供条件としての根拠資料の提出
  - 2. 発達障害の把握と対応の困難
  - 3. 全学的な支援体制整備の必要性と課題
  - 4. 学内の理解・専門性・情報共有の課題
  - 5. 情報保障の人的確保と質の維持
  - 6. 支援提供にかかる予算や支援内容・成績評価の基準
- 特に、支援を申し出ない潜在的な発達障害学生への対応、またそのような学生を支援につなげるアプローチが課題として挙げられている

} 特に大きく  
関与

※大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査分析報告  
(対象年度：平成17年度から平成26年度) 第5章より

# 統計から見える発達障害学生支援の現状②

(平成29年度JASSOの実態調査結果報告書より)

## • 実施されている就職関連の支援（実施率順）

1. 就職支援情報・支援機関の紹介（39%）

2. キャリア教育（33%）

3. 就職先の開拓・就職活動支援（30%）

4. 障害学生向け求人の紹介（27%）

# 自由記述に見る障害学生の就職・キャリア支援課題 (JASSOの実態調査分析報告より)

- 修学支援よりも就職支援の課題に関する自由記述数のほうが多く、中でも発達障害にまつわる課題を挙げる内容が多い。
- 課題として上げられた4グループ
  1. 学外連携による専門的支援と部署間連携
  2. 発達障害学生の障害認知と早期支援
  3. 学外実習の困難や卒後に及ぶ移行支援
  4. 発達障害学生の障害者枠利用への葛藤と企業とのマッチング困難
- 具体的な課題
  - ✓ 卒業研究・論文と就活の両立ができない
  - ✓ 一般的なキャリアガイダンスを受けて落ち込む
  - ✓ 障害者枠を希望しないが、就職活動が困難な学生をどの部署で支援するか
  - ✓ 学外機関との連携や学内の部署間連携
  - ✓ 社会移行を支えるインターンシップや卒後支援
  - ✓ 卒業後も就職が決まらない学生や、早期離職をした学生から大学に相談がある

※課題から、当事者等への支援と同時に社会や雇用制度にも多様性受容のための柔軟なアプローチが必要であることが示唆された。

## 2. 発達障害学生に対する面談の意義





# 発達障害学生に対する面談の意義

## <学生と支援者との面談>

- 体験を時系列に沿って語る場
  - トピックスに絞って語る場
  - 対処法を検討する場
- 
- 語りによって、意思（自分の考えや思い）が、学生と支援者間で共有される。
  - 学生自身が自分の考え（意思）として自覚し、経験値としてまとめ上げるプロセスが重要で、支援者は面談を通してその機会を提供している。
  - 診断を受けて間もない学生の言葉
    - 自分が何ができて何を支援要請すればよいかわからない。これまでの人生は一生懸命に頑張るだけだった。診断を受けたからといって、「じゃあ、こんな配慮をお願いします」ということにはならない。自分の中の何が障害特性で、自分には何ができるのか、私にとって合理的配慮とは何なのかを一緒に話し合い、相談に乗ってくれる人が欲しい。

- 自分を振り返ること、自分のことを語る機会が少ない。
  - 診断が告知されて間もないので、特性理解ができていない。
  - 障害に関する配慮を求めた経験がない  
⇒ 支援に関する意思表示を行った経験がない。
- ★ 修学支援のなかで、「語る機会を持つ」「自分の特性や必要な配慮を知る」等の経験の場を保障する。

# 修学支援：実行を支え、自己理解を支える

事実を整理する → 出来事を時系列で思い出し記述する

予定通りできたこと、うまくいかなかったことを整理する

うまくいかなかったときは、対処法を支援者と一緒に考える

実行できそうな方法を選択し、実際に試してみる

結果に至るプロセスを支援者と一緒に振り返る

自分に合った対処法を経験知として認識する

複数の経験知の共通点について、を見つけ出し、形式知として整理する

新しい場面でも、対処法を考え、実行までのプロセスを描く

自身の特性をどのように伝え、どのような配慮を求めるかを考える

結果を確認しながら、よりよい対応策を考えていく

# 自分のことを語る ⇒ 自己物語

- 「自己」は自分自身について物語ることを通じて産み出される。
- 自分の経験を世界の中に位置づけるには、**その経験を他者に承認してもらい共有してもらう必要がある。自己物語が社会性を獲得するには他者との語りが必要である。**

榎本博明（2002）「<ほんとうの自分>のつくり方」講談社現代新書

浅野智彦（2001）「自己への物語的接近」勁草書房

富山大学では・・・

- 発達障害学生の修学支援では、学生と支援者との対話そのものが、コミュニケーション支援の場として機能している。
- 修学支援の目的を共有し、その実現のためにお互いに知恵を出し合うというスタンス（物事に向かう姿勢）を共有する関係性を保つ。

### 3. 発達障害学生の就労を実現する ための支援の在り方



# 発達障害の特性

- 実行機能の障害
  - 意思決定・計画立案・計画実行・効果的遂行
- 環境に影響されやすい
- 場依存的
  - 自発的に事態を構造化したり、自分にとって処理しやすい状態に変換することが難しい
- 現実には常に動いており、問題はそこに起きている
  - どのような場面で、どういう出来事の中で、問題が起きたのかを整理して、描写することから始める必要がある。
  - 客観的な根拠資料だけで、配慮内容を決定することは難しい。

# 参考になる支援方法：コーチング



- クライアント(相談者)が自身の強みを発揮し、問題解決や目標達成、スキルの向上を行うプロセス。
- 問いかけて聞くことを中心とした“双方向なコミュニケーション”を通して、本人がアイデアや選択肢に自ら気づき、自発的な行動を起こすことを促す手法。
- カウンセリングや心理療法と比べ、クライアントの強みに目を向け、問題解決や目標達成、スキルの向上を支援する。
- クライアントの主体性を尊重しつつも、スキルの向上や問題解決能力の促進を通して、クライアントと環境との関わりの改善を目指す能動的な支援方法である。

# 専門職における職務に必要な 技能・技術に関する支援

職能団体が作成したさまざまな技術的な  
到達水準を活用することができる！



# 大学における臨床実習分野における到達目標

- **OSCE** (Objective Structured Clinical Examination)
  - 客観的臨床能力試験
  - ペーパーテストによる知識重視の教育ではなく、判断力・技術力・マナーなど実際の現場で必要とされる臨床技能の習得を、適正に評価する方法
  - 臨床実習後OSCE (Post-CC OSCE) : 医学部
- **CBT** : コンピューターを利用した学習支援システムのこと
  - 医療系分野では、職能団体主導で実施
  - 教員養成系分野 教育実習前CBTプロジェクト 北海道教育大学
- **JABEE** (Japan Accreditation Board for Engineering Education)
  - 一般社団法人日本技術者教育認定機構
  - 国際的に通用する技術者の育成、それに必要な教育の質保証などの社会的ニーズを背景に、高等教育機関（大学、高等専門学校等）の技術者教育プログラムの審査・認定を行う非営利団体として、1999年11月に設立された。
- **クリニカルクラークシップ制度**
  - 診療参加型臨床実習のことであり、従来の見学型臨床実習とは異なり、学生が医療チームの一員として実際の診療に参加し、より実践的な臨床能力を身に着けることを目的とした実習スタイルのこと。

# 医療系分野・工学系分野における支援

- 支援者にとって、職務に必要な技能・技術に関する情報は、支援方法を検討する上で重要な手がかりとなる。
  - たとえば、医薬系学部では、OSCEが実地実習や臨床実習を行うための通過点となっているので、マニュアルを参照すると具体的な「求められている職務遂行能力」を知ることができる。

- 技術・技能の習得までのプロセスに支援者が関与し、学びの機会を保証する
- ささまざまな法令・条例を根拠にしつつ、合理的配慮を検討する

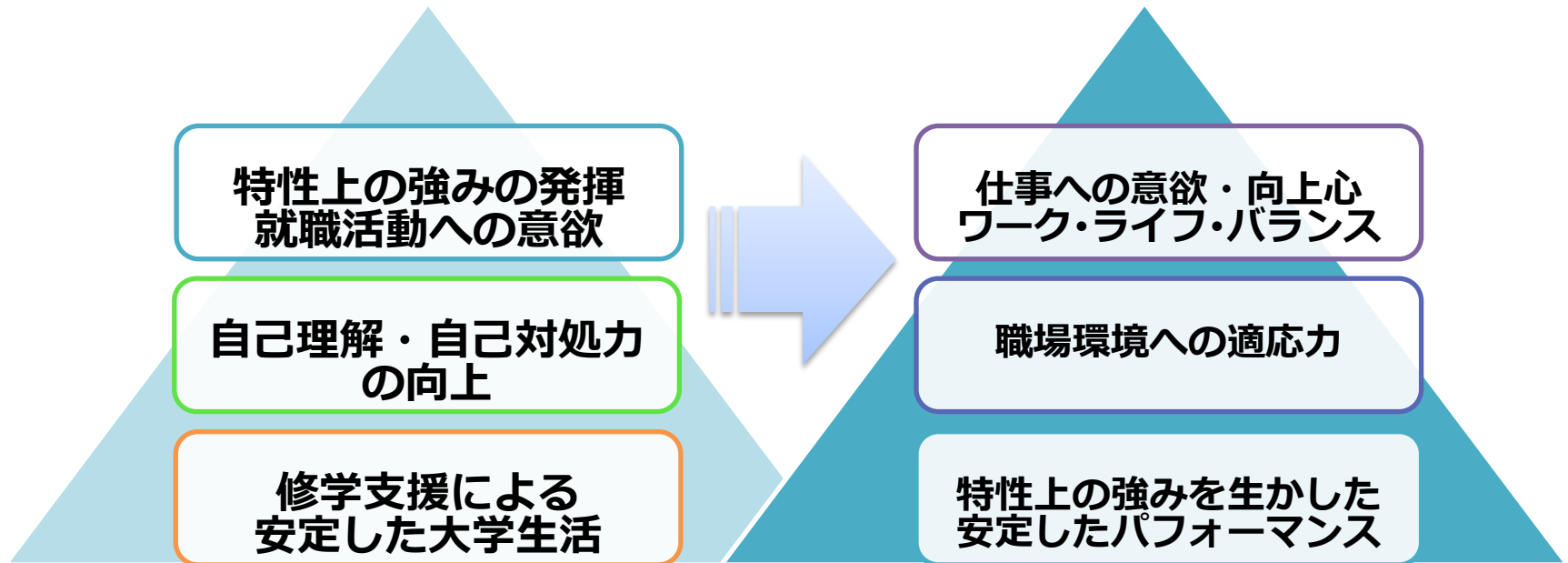
## 4. 「学ぶ」と「働く」を支える支援



# 「学ぶ」から「働く」へ

修学支援による成長

職業人としての自覚



◆ これまでの主な採用職種例

- ASD特性：IT技術系，品質管理，伝統工芸，公務員，データ管理，事務系
- ADHD特性：営業系（ルート），介護系，総合職，研究開発職

# 定着支援で聞かれる卒業生の声

## ＜事務職＞

- ✓データ分析など、大学で学んだことが役に立っている。
- ✓会社の業績アップに貢献している実感が仕事の励みになる。

## ＜職人・技術職＞

- ✓先輩の技術に早く追いついて、伝統工芸を守っていきたい。
- ✓芸術性の高い作品づくりに携わっていることが嬉しい。
- ✓さらに高度な資格を取って、仕事の幅を広げたい。

# 企業担当者からの評価

## ＜事務職＞

- ✓他の社員よりも、自社の売り上げや全国データを把握し、新しい提案をしてくれる。
- ✓与えられた仕事は、間違いなく正確にこなすので信頼できる。
- ✓大学や就労移行支援事業所との支援会議により、事前に本人の特性を把握し、環境調整できているため、問題なく勤務できている。

## ＜職人・技術職＞

- ✓技術を磨くための努力を惜しまない。
- ✓技術・感性・知的なところも含めて、他人を寄せつけない魅力を持つようになるだろう。

# 青年期から成人期への橋渡しとしての支援

- 大学における支援は、具体的問題の解消だけにとどまらず、解決するプロセスを通して青年期の心身の成長をサポートする発達促進的な意味合いがある。実質的な行動に関する支援を一義的な目的にしながらも、彼らの漠然とした内的世界を言葉に表し、自己を見つめる機会としての意義がある。
- 自分自身を振り返る作業は時に苦しみを伴うものであるが、支援者が彼らの変容のプロセスを下支えすることで、学生は精神的な成長や変容を実現していく。
- 青年期は、学生が自分自身の弱みと強みを引き受けて生きていくこと等、アイデンティティに関わる課題に対峙する時期である。このような人生の節目に当たる青年期の学生の心的成長を促し、彼らが肯定的な自己像を持ちながら社会参加していくための支援をしていきたい。